

# 活字の生態

中山弘明

新しい『漱石全集』の刊行が話題となつて  
いる。残された草稿類との本文照合による全  
集というのがその触れ込みである。また巷は  
戦後何度目かの「漱石ブーム」だそうだ。石  
原千秋氏はそうした「現象する漱石」の有り  
様を、「バラテクト」「メタテクト」それ  
ぞれ多様に照明を加えてもいる（『季刊文学』  
平5・夏）。確かに〈漱石〉を下敷きとした  
り、題名に冠した小説、評論類の多様さは現  
今のブームの一端を象徴していよう。また川  
村湊氏はこうした〈現象〉として反復される  
〈漱石〉を、柄谷行人流の「ヒューモア」を  
キーワードとしつつ「死や病や時代の変化に  
直面した時、人はヒューモアによつて自分と  
他人を解放しようとする」と肯定的にとらえ  
てもいる（『朝日新聞』平4・6・17夕刊）。

なるほど〈現象〉を笑うこと自体は、「ヒュー  
モア」と対極の「イロニー」の産物であり、  
自己の優位性の誇示にしか繋がらぬ点で不毛  
である。むしろ真に留意すべきは、〈現象〉  
が市場経済の論理と不可分の関係にあり、  
〈文学〉もそれにけしして無縁でないという、  
言わば当然すぎる事態であるはずだ。『漱石  
全集』刊行が全国の各種教育機関、図書館に  
よつて支えられ、またそれによつて育つた  
〈国民〉に支持されている点からも、これは  
自明であろう。大部で高価な全集が市場にの  
る根拠には、〈文学〉がこれまで等閑視して  
きた経済原理との根深い関係があることは注  
視せねばなるまい。また〈全集〉が作家を権  
威化する上で明治以降大きな機能を果たして  
来た事実も看過しえないが、昨今はまた新た

な「全集の時代」としても出版史上一時を画  
するのではあるまいか。漱石のみならず近年  
刊行されて話題をまいてる近代の個人全集  
を拾つてみても——永井荷風、森敦、堀田善  
衛、澁澤龍彦、柴田宵曲、尾崎紅葉、田山花  
袋、小川国夫、等々数え上げればきりがな  
い。なかには柴田のような一昔前では考えられな  
いマイナーポエツトも含まれ、また一方では  
花袋の如く「定本」を冠しながら、先の出版  
市場との関係から多くの遺漏作を含まざるを  
えぬ実情もあるわけだ。

そもそも我々が研究のまねごとを始めるに  
際して、口酸っぱく言われ続けて来たことは  
「全集を買え、そして読め」という呪文にも  
似た事柄ではなかったらうか。そこには個人  
全集という制度に囲われた作家の〈作品〉を、

まさに断簡零墨にいたるまで読み尽くすこと  
によって、はじめて研究が開かれてくるとい  
った幻想が隠されていたと言えよう。ご多分  
に漏れずわが家の書棚にも幾種類かの全集類  
が鎮座しているが、〈全集〉を所有すること  
が研究の第一歩として誤認され、またそれを  
並べることで当の〈作家〉自体を所有したか  
の如き觀念が蔓延ることそのものが一つの妄  
想でしかあるまい。それは先に言及したよう  
に個人全集があくまで市場の論理の中で成立  
し、多くの遺漏と選択が編者によって施され  
ている事実からも明らかであろう。一方研究  
を始めるにあたってのもう一つの問題点は  
「この全集は信頼がおけるか？」といったこ  
とであったはずだ。ここでの「信頼」とは、  
無論本文確定にあたり初版、初出等との厳密  
な校合が施されているかといった議論を指す。  
その場合あたかも〈全集〉は〈科学的〉〈学  
問的〉に鑑われた不動の権威として、我々を  
拘束する原理となるわけだ。いずれにせよ  
〈全集〉が一方で作家を特権化し読者に手渡  
す装置であり、他方市場にのる上で多くの操  
作を施された対象（本文）でもある事實はき  
ちんと認識しておくべきであろう。

こうした問題を考えていく上で、重い課題

を我々に突き付ける一本が刊行された。山下  
浩著『本文の生態学』（平5・6・日本エデ  
ィタースクール）である。山下氏はもともと  
英文学書誌の専門家とのことだが、ここでは  
漱石、鷗外、龍之介の〈本文〉確定までの過  
程を驚異的執拗さで草稿から掘り起こし、ま  
さに舌を巻かざるを得ない。氏の〈本文〉確  
定へむけられた厳しい眼差しは、〈科学的〉  
〈学問的〉を隠れ蓑にした研究制度を容赦な  
く打つてくる。恐らく氏の批判に傍観的態度  
をとれる研究者は一人として存在し得まい。

ただ一方で時折気になるのは、書誌の専門家  
らしいオリジナル信仰の如きものがほの見え  
る点である。明治期の作品などにおいては原  
稿が散逸しているものは少なくない。そんな  
中でルビ、傍点、変体仮名、当て字等の問題  
を吟味することは多くの困難を要する。氏の  
本に欠けていると思われるのは時代の文法認  
識や表現をめぐるコードへの目配りではない  
か。所謂〈近代日本語〉が確定してくる中で、  
何をもって〈誤字〉とし、何をもって〈当  
て字〉とみなすかの根拠は微妙に変化を遂げた。

そう考えるなら句読点一つの打ち方をもなお  
ざりに出来まい。一方山下氏の大きな手柄は  
植字工をはじめとした、時代の出版機構への

執拗な調査であろう。残された原稿に付され  
た印を手掛かりに、植字工の癖まで推定して  
いくプロセスは圧巻という外はない。ここで  
我々がさらされている状況は、〈活字〉その  
ものがまさに変動し生きているといった事実  
であろう。〈活字〉自体をニュートラルなも  
のと誤認し、〈活字〉を通じてじかに作家の  
実像と体面出来るといった幻想は、こうした  
氏の調査の前に崩壊せざるを得ないわけだ。  
〈作品〉と〈読者〉の間に介在するこうした  
出版機構の存在を我々は等閑視すべきではあ  
るまい。『漱石全集』にしても、原稿から浮  
かび上がる逸脱の妙を通して、それを排除し  
駆逐することで〈国民作家〉を創り上げた時  
代の文化の有り様をこそ注視すべきであろう。

〈活字〉が電子写植に変貌し、カセットブ  
ックやビデオ等の多様なメディアによる作品  
翻訳が縦横に進む今日なればこそ、我々は改  
めて〈活字〉の生態に目を凝らしていく必要  
性があるのではないか。